

令和2年度
全国公立大学学生大会
LINKtopos 2020
in 岡山
～再考～
報告書

期日 令和2年9月26日(土)～27日(日)
会場 岡山県立大学／Online



公立大学学生ネットワーク

LINK topos

【目次】

- 0 はじめに
- 1 大会プログラム
- 2 参加者の対象と推移
- 3 活動内容とその成果
 - 3.1 大会1日目
 - 3.1.1 開会式
 - 3.1.2 アイスブレイク
 - 3.1.3 講演会
 - 3.1.4 ワークショップ概要
 - 3.1.5 ワークショップ
 - 3.1.6 1日目総括
 - 3.2 大会2日目
 - 3.2.1 ワークショップ発表
 - 3.2.2 地区別LINKtopos概要
 - 3.2.3 地区別LINKtopos
 - 3.2.4 ポスターセッション概要
 - 3.2.5 ポスターセッション
 - 3.2.6 閉会式
 - 3.2.7 2日目総括
 - 3.3 プログラム全体を通して
 - 3.3.1 プログラム全体の事後アンケート結果/参加者の声
 - 3.3.2 プログラム全体の総括
- 4 次年以降の学生大会開催に向けて課題、課題への提言
- 5 全国公立大学学生大会の今後の展望について
- 6 謝辞

はじめに

今年で9年目を迎えたLINKtoposは異例のオンライン開催となったが、企画チームの先生方をはじめ、参加していただいた皆様のおかげで無事に大会を終えることができた。

来年2021年がLINKtoposのきっかけとなった東日本大震災から10年という節目であることから、昨年からLINKtopos2021に向けて「防災・減災」という軸のもと大会を作り上げてきた。今年も、開催予定都市であった岡山を発信拠点とし、岡山の豪雨災害などの事例をもとに組み立てたワークショップを中心とした大会となった。

昨年のLINKtoposでは初のフィールドワークを行い、現場を知ることで、私たち公立大学生には防災・減災に関して地元や日本のために何ができるのかを考えるきっかけとなった。そして今年も、新型コロナウイルス拡大防止として、初めてのオンライン開催を行い、初めて続きのLINKtoposであったが、公立大学生のチャレンジしていく姿を見せることができ、これからのLINKtoposへの期待を高められたのではないだろうか。

以下は今回の大会に関するまとめである。LINKtoposへの理解と来年度以降のLINKtoposの活動に役立てて欲しい。

LINKtopos2020 代表 高知県立大学 文化学部 4年 仲宗根忠史



1 令和2年度全国公立大学学生大会 大会プログラム

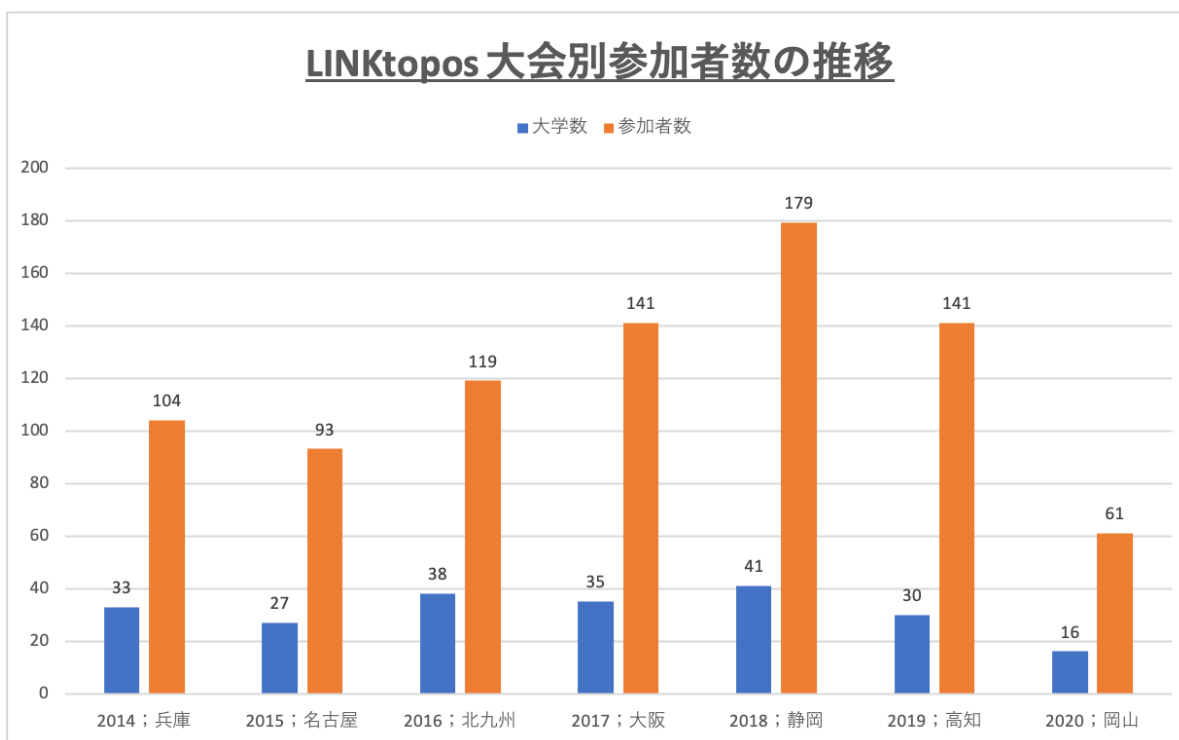
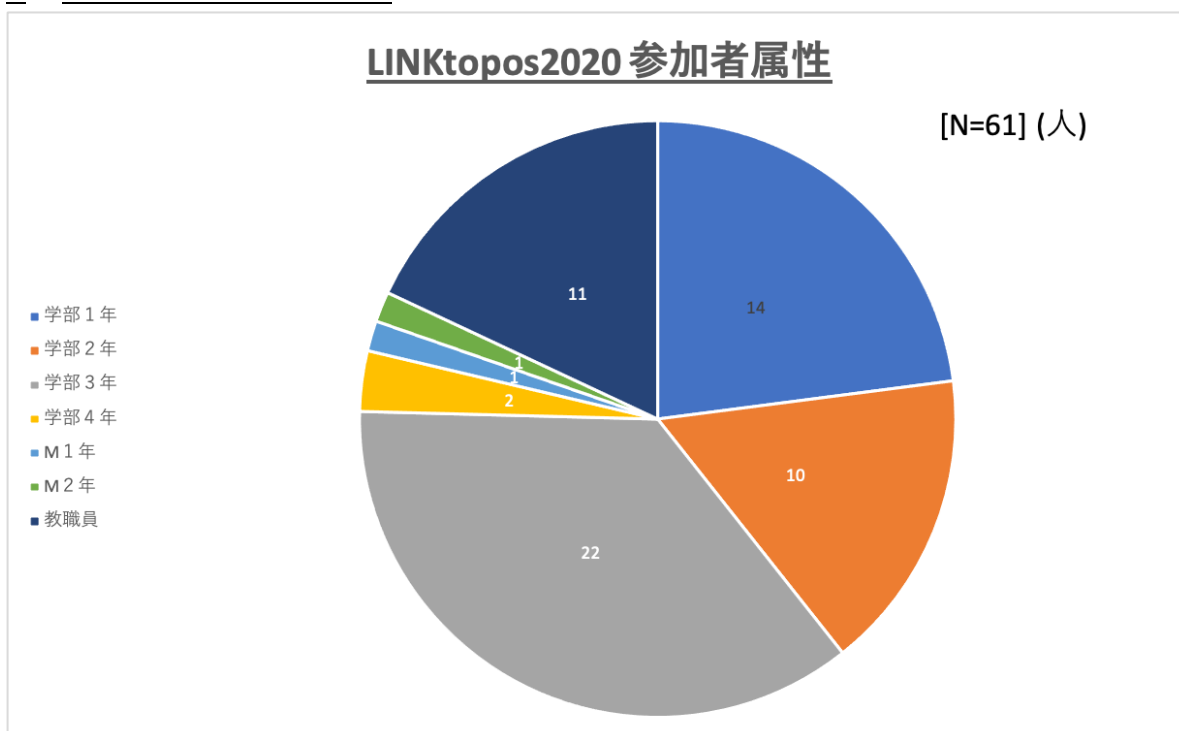
<大会1日目>

13:00	各大学に集合（準備）
13:05~13:15	開会式
13:15~13:40	アイスブレイク
13:40~13:45	ゲストスピーカー紹介・講演準備
13:45~14:45	講演会
14:45~14:55	休憩
14:55~16:30	ワークショップ①
16:30~16:40	休憩
16:40~18:00	ワークショップ②
18:00~18:10	1日目総評、2日目の連絡 解散

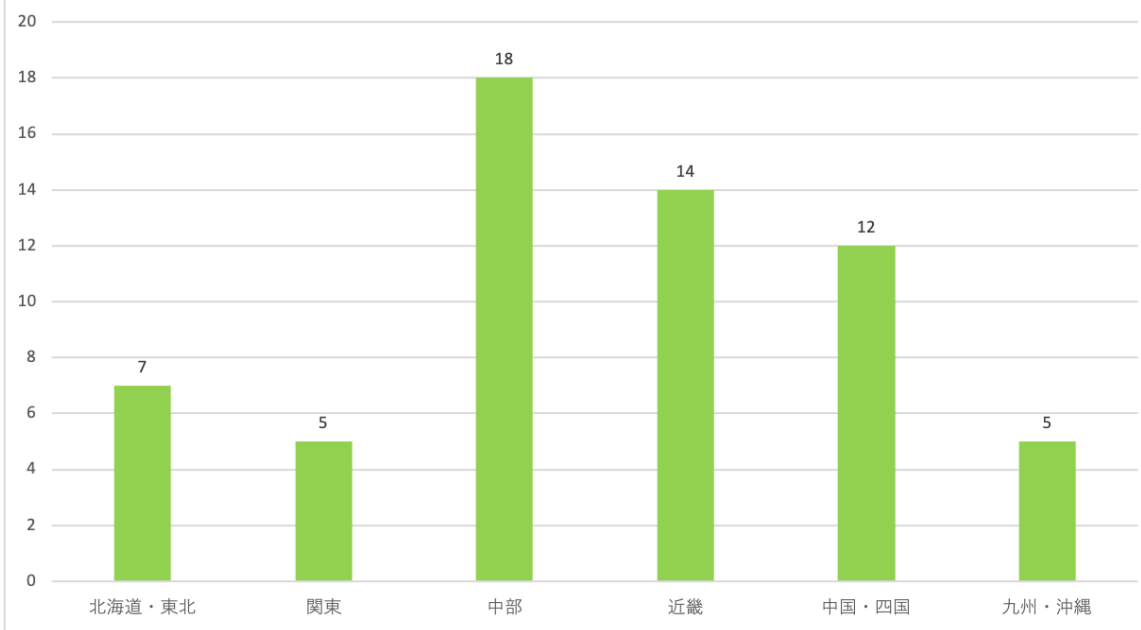
<大会2日目>

10:00	各大学に集合（準備）
10:05~10:10	スケジュールの確認
10:10~12:10	ワークショップ③ 全体共有
12:10~13:10	昼食
13:15~13:30	地区別LINKtopos説明・準備
13:30~14:30	地区別LINKtopos
14:30~14:40	ポスターセッション質疑応答タイム 説明・準備
14:40~15:30	ポスターセッション質疑応答タイム
15:30~15:40	閉会式 準備
15:40~16:00	閉会式

2 参加者の対象と推移



LINKtopos2020 エリア別参加者数



3 活動内容とその成果

3.1 大会1日目

3.1.1 開会式

【LINKtopos2020 学生委員 兵庫県立大学 工学部 4年 高木健吾】

○概要

参加者に向けての大会概要説明および諸注意のほか、副代表田邊と先生方から挨拶があった。

3.1.3 講演会

【LINKtopos2020 副代表 名古屋市立大学 人文社会学部 3年 田邊志織】

○概要

下原・砂古自主防災組織副本部長の川田一馬様、総社市危機管理室主任の平田泰介様のお2人に、合わせて6分にもわたり、岡山県立大学の講義室よりオンラインで全国の参加者に向けてご講演いただいた。

○成果

岡山での豪雨災害などの災害の際に、避難所運営を含め、どのような活動を行ったか、また普段からどのような活動をしているのかを教えていただくと共に、現場で防災組織、市役所職員のそれぞれの立場から見た現場の状況や寄せられる声などについてもお話していただいたが、これはそのあとに続くワークショップで出てくる意見や考えをより広げることにもつながっていたと感じた。例年はワークショップのテーマごとにゲストスピーカーを招聘していたため、「他のテーマの講師のお話も聞きたかった」という声があったが、今年は全員が2人とものお話を聞いたので、その点に関しても良かったと思う。参加者からは、実際に経験された方からの話はリアリティがあり、普段大学で学べる内容とは違った角度での考え方を知ることができたことへの評価が多く見受けられた。

○課題

質疑応答の時間をしっかり取れなかったこと、講演時間が短く、飛ばしてしまう内容が多かったことに関して、参加者運営ともに残念だった。来年はもう少し伸ばすか、事前に講演の資料を送り、時間が無くなった場合でも質問等に対応できるようにする。（今年は開催後に資料を公開した）

3.1.2 アイスブレイク

【LINKtopos2020 学生委員 名古屋市立大学 人文社会学部 2年 伊藤遥菜】

○概要

開会式後ランダムにブレイクアウトルームに分け自己紹介を兼ねたゲームを15分間かけて行った。各ルームには1人以上運営が進行役として入りアイスブレイクを進行した。行った内容は以下の二つである。なお、それぞれ既存のゲームであるが、オンラインでもやりやすいように一部ルールを改変し行った。

(1)good&new

進行役が順番に参加者を指名していき、指名された人に所属大学・名前・最近あった良かった（嬉しかった）ことや新しいことについて紹介してもらう。

※良かったこと・新しいことはあくまでも、簡単に言いやすいテーマとしてあげているため、他に言いやすいテーマがあれば各自で変えても良いことにした。

(2)just one

<用意するもの>

紙と太めのペン

<方法>

- ①進行役が回答者を1人指名（立候補もあり）し他の人にはヒントを出す側に回ってもらう。
- ②回答者は目をつむってもらう・もしくは画面を見ないでもらう
- ③進行役がお題についてヒントを出す人に見てもらいそれに関係するものをヒントとして文字で書いてもらう。
- ④ヒントが書き終わり次第、画面に映してもらいヒントが被ったらおろしてもらう
- ⑤被っていないヒントが出そろったら、回答者に目を開けてもらいお題が何であったのかを当ててもらおう。

例：お題として体育祭を出した場合、ヒントとして「リレー」や「大玉転がし」などがヒントになる。

○成果

・全体での説明の際に運営が実際にやってみたこともあり多くの人にルールを把握してもらうことができ、振興がスムーズだった。

・始まったばかりで緊張していた空気が少し和らいだ。

・運営側の空気感が伝わり、初参加の人にも大会の雰囲気をつかむのに役立ったという感想が見られた。

○課題

・オンラインだったために多くの人に話始める際戸惑いがあったように感じられた。
・気軽に相手に話かけたりできるような空気づくりが必要だと思った。
・すぐに離れてしまうグループなので、ワークショップのときだけでもいいのではないかという意見があった。

3.1.3 ワークショップ概要

【LINKtopos2020 学生委員 静岡県立大学 国際関係学部 3年 杉山芽依】

○概要

「参加者が、災害について自分ごととして考え、多様な視点から見るができるようになる」ことを目標とし、講演会でいただいたお話と参加者の実体験をもとに、豪雨災害が起こった岡山と参加者それぞれの地域について共通の課題点を挙げ、その課題に対する解決策を提案する企画書を作成した。

1日目は、課題点の列挙・整理、企画書のテーマ決め、解決策の議論と企画書作成という流れで、Zoomのブレイクアウトセッション機能を活用してグループワークを行った。

3.1.4 ワークショップ

〈テーマ①：性別〉

【LINKtopos2020 副代表 名古屋市立大学 人文社会学部 3年 田邊志織】

○概要

性別に関連するテーマを各グループが設定し、防災に関する企画書を作成してもらった。まずは自由に意見を出してもらい、テーマ設定をしたのち、企画書作成へ。2日目には各グループ発表し、投票で1位になった班が全体で発表した。LGBTやシングルマザーなど、様々な角度から「性別」を捉え、それぞれの災害時や防災活動上の課題を考え、その解決策や大学生に何ができるかを考え、議論を重ねていた。運営は各グループをまわり、話し合いの停滞などのサポートや、質問の応対、アドバイスをを行った。

○成果

使用ツールや完成形を明確に示すことをあえて避けたことで、「性別」にこだわりすぎない幅広いテーマや、柔軟な意見・アイデアを発表してくれるグループが多く、昨年度以上の満足感が運営としてあった。

運営がまわって意見を言ったり、参加者からの質問に答えることに関して、話し合

いを凝り固まったものにしてしまうのではないかという懸念はあったが、運営一人一人がこまめに各グループそれぞれに時間をかけて対応したことについて、オンラインでの話し合いやワークショップ自体が初めての人でもやりやすかったというように、比較的行為的に捉えられていたようだ。

○課題

ワークショップ全体の課題だが、オンラインのため2日とも参加できない、傍聴のみの予定だったが班に振り分けられていたなどの人がいて、人数が少なくなり、負担が各グループでバラバラだった。

こちらからフォーマット指定しなかったことや進め方についての指示が不足だったことで、時間が足りなくなり、プログラム外で多く時間を取られてしまったという声もあり、多様性との兼ね合いは今後の課題であると感じた。

〈テーマ②：年代別〉

【LINKtopos2020 学生委員 長崎県立大学 地域創造学部 2年 松元広貴】

○概要

まず初めに災害時の年代別における様々な問題について、各グループで意見を出し合ってもらった。次に出てきた意見の中からどの課題に着目するかを決めてもらい、具体的な企画書作りに入ってもらった。この際運営メンバーとしてはこの出だし部分が重要であると考えたため、積極的に各グループにアドバイスや質問をして企画書の中身が充実するように心がけた。二日目にグループで企画書を共有して、災害時における年代間について多角的にそして、自らが現場にいた場合にどういうことが出来るのかお互いに考えることが出来ていた。

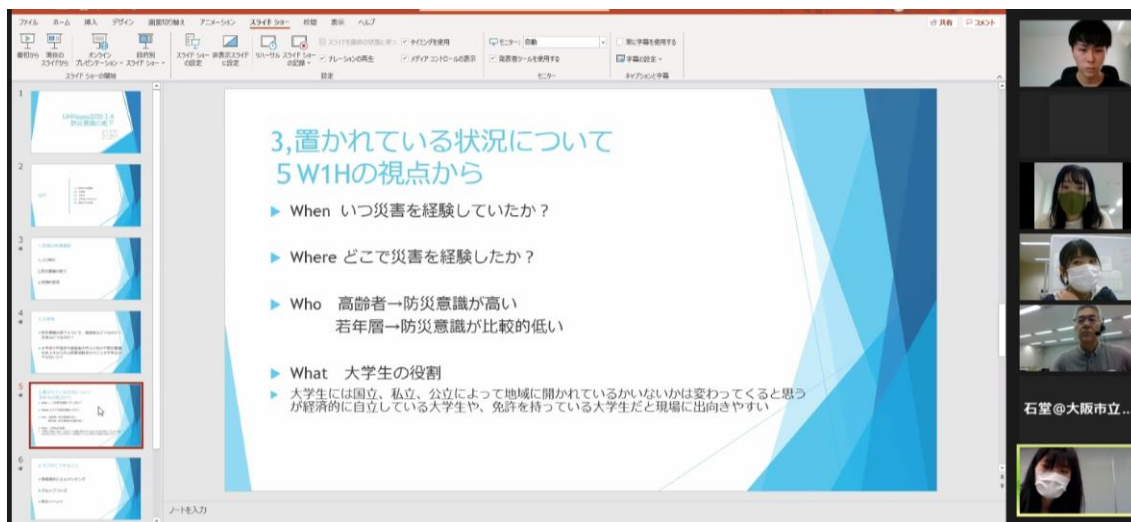
○成果

成果としては、年代別の課題ということで主に「災害時の情報共有に若者と高齢者では差がある」という点で企画書を作ったグループが多く見られた。また、課題の解決方法という点で自分が参加している団体を具体例に挙げている人もおり、お互いの活動に関する紹介も出来ていてかなり有意義なものだったと考えている。そして、今年ならではの、パソコンを使ったことでグループ全員での企画書作成が出来ていた。かなり効率的な作業であり運営が各グループに回った時も一目で進捗を確認できたので、来年以降がオフライン開催であったとしてもWSの際には各自のパソコンを用いて作業することを推奨したい。

○課題

課題としては、ファシリテーターの手腕により進捗に大きな差が発生したことだ。これについては、議論が不活発なグループには運営が適切に介入するべきであったと

考えている。反対に教員がファシリテーターとなっているグループもあり、とても良いペースで議論が進んでいるグループも見受けられた。来年以降は、議論が不活発なグループに運営はどのように介入すれば良いか、ということも運営間での共有やレクチャーなどが必要であるように感じた。



※Zoomの画面共有を利用している風景

〈テーマ③：地域連携〉

【LINKtopos2020 学生委員 静岡県立大学 国際関係学部 3年 杉山芽依】

○概要

防災のために地域との連携で学生にできることは何かというテーマについて、各グループで企画書を作成した。

地域住民の防災意識の低さを課題点として挙げたグループが多く、「防災メシ」を通じて地域住民同士顔見知りの関係を作るといった案や、避難所に関する課題への解決策として空き家の活用を提案した。

運営委員からブレイクアウトセッションの操作主を一人配置し、他の運営委員が各グループの様子を見て回りながらアドバイスしたり、アナウンス機能を活用して必要なときに声かけを行った。

また、先生方にも各グループの様子を見てもらえるよう、適宜ブレイクアウトセッションの組み直しを行った。

○成果

各グループでファシリテーターや書記を決めてもらったことで話し合いがきちんと回り、オンラインでありながらも各グループの成果物をきちんと形に残すことができた。

アウトラインと企画書のひな型のみを提示し細かい部分を参加者に委ねたことで、企画書に多様性が生まれた。

アンケートの結果から、参加者同士で刺激を受けながら楽しく取り組むことができた

ことがうかがえた。

○課題

他のテーマでも起こったことだったが、一部のみの参加であったり通信環境の問題で、グループのメンバーが少なくなるなど、偏りが生まれた。このような状況を想定して、グループ数を減らし、1グループの定員を増やしておくべきだった。

また、大会のスケジュール上仕方ないことではあるが、ワークショップ自体の時間が短く、参加者同士が打ち解ける時間や企画書の内容を詰める時間を長く取ることができず、時間が足りないグループには大会の時間外で企画書に取り組んでもらうことになった。

アイスブレイクやKJ法の説明について、言葉のみの説明になってしまい、図などを見せなかったため、参加者にとって分かりづらい部分があった。

3.1.5 1日目総括

【LINKtopos2020 副代表 岩手県立大学 社会福祉学部 3年 菊池真悠子】

大会1日目は、講演会やアイスブレイク、ワークショップが行われた。オンラインで行うことで運営だけでなく、参加者も不安を抱えていたと思われるが、ワークショップが始まると学生同士の交流が進み、雰囲気も柔らかくなった。1日目は、プログラムに大きな滞りなく進み、その後のLINEのオープンチャット機能を使用した連絡もスムーズに行われていた。

3.2 大会2日目

3.2.1 ワークショップ発表

【LINKtopos2020 学生委員 静岡県立大学 国際関係学部 3年 杉山芽依】

○概要

2日目は、グループごとに企画書の詰めたのち、各テーマでの発表、全体での発表を行った。

各テーマで全グループの発表、質疑応答を行ったのち、あらかじめ用意しておいてwebの投票機能を用いて投票を行った。

投票については、実現可能性や得られる効果が高いもの、または参加者自身が実際にやってみたいと思う魅力的な案であることを基準とし、各テーマで選ばれた1グループが全体での発表を行った。

○成果

アンケートより、「他地域との比較ができたり、災害時に様々な条件での対応の仕方を考えられる」との意見があった。

例年に比べて企画書の内容は多様性に富んでおり、運営委員にとっても新鮮なものが

多かった。他のテーマの企画書ももっと見たかったという意見があり、参加者にとっても非常に刺激を受ける企画書が多かったことが窺える。
また、前日のうちにほとんど企画書を完成させ、2日目の冒頭ではすでに発表の練習をしているグループもあった。

○課題

参加者の作成した企画書はどれも非常に内容が濃く、発表の時間が足りないグループも多かった。また、質疑応答が続くことで時間が押してしまう場面もあった。この企画書に対する交流はLINKtoposの中でも非常に大切にすべき時間であるため、もっとゆとりをもって設定しておくべきだと感じた。

投票の際にもたついてしまうことがあったので、あらかじめ手順をシミュレーションし、スムーズに開票できるようにするべきであった。

3.2.2 地区別LINKtopos概要

【LINKtopos2020 学生委員 島根県立大学 総合政策学部 4年 伊藤璃子】

○概要

今回の地区別LINKtoposでは、初めに地区別LINKtoposについて説明をすると共に過去に開催された近畿、中四国、九州沖縄地区の地区別LINKtoposの紹介を行った。また、地区別LINKtoposの運営メンバー募集についても呼びかけた。

その後、地区ごとに分かれて今大会での学びの共有を中心に行った。

3.2.3 地区別LINKtopos

〈東北地区〉

【LINKtopos2020 学生委員 岩手県立大学 総合政策学部 2年 田頭知樹】

○概要

今年は東北地区3校と関東地区1校が参加し、今大会の感想等を共有した。参加学生たちは、大会に参加しての学んだことやこれから実践したいことなど、熱い思いが多く述べられた。

※関東地区の参加校が1校であったこと、該当校が東北地域に関係する活動を行っていたことを鑑み、東北地区と合同で地区別LINKtoposを実施した。

○成果

オンラインという状況ではあったが、参加学生全員が熱い思いをたくさん発表してくれた。今後につながるような貴重な意見も出たので、これから多くの学生をつなげて行くための1歩となった。

○課題

新型コロナウイルスの影響で、実際に集まって地区別LINKtoposが行えない状況であるため、今後どのようにして地区別LINKtoposを開催するかという課題が挙げられた。

〈中部地区〉

【LINKtopos2020 学生委員 岐阜薬科大学 薬学部 2年 佐藤夏帆】

○概要

中部地方の4県(愛知・岐阜・静岡・富山)の大学が参加した。今年度の全国LINKtoposの参加者が参加してみての感想を、運営メンバーが運営を行なって見ての感想等を述べ合った。最後に、運営委員への勧誘とともに、中部地区の学生間の友好を深めるきっかけにするために、1日目のアイスブレイクで取り扱ったJUST ONEを行った。

○成果

参加者全員が感想を述べることができた。名古屋市立大学で名市大LINKtoposを開催した例をあげ、他の地区で昨年行われていたような地区単独で行うLINKtoposとして、中部地区で実際に顔合わせをし、話し合いの場が設けられたらという案が出てきた。全体の場では述べにくかった運営への意見や参加した背景など、少人数だからこそ聞ける声が運営としても受け取れたのが良かったと思う。

○課題

大会中に音声を基本的に消すように喚起していたことや、オンライン会議特有の声の出しづらさから、運営からの問いかけに対し意見が出る場面が少なかった。また、中部地方に所属している大学が地理的に離れたところに位置しているため、実際に顔合わせをするにはどこにするのか・どのように開催するのかという問題点が挙げられた。

〈近畿地区〉

【LINKtopos2020 学生委員 兵庫県立大学 工学部 4年 高木健吾】

○概要

最初に今大会の感想(良かったこと、悪かったこと等)を近畿地区の学生及び先生方から1人1人話してもらった。そのあと、今後の近畿LINKtoposの開催や運営について紹介し、コロナの影響により各大学が悩んでいることを話し合ったり、今回新たに導入したオンラインは今後LINKtopos等でどう活用するべきか等を話し合った。

○成果

近畿地方の学生で話し合う機会を設けることで、同地域の学生の距離を縮めることができた。また近畿LINKtoposの話をする中で、必要性や意義を知ってもらい、先生方から今後近畿LINKtoposをどうするべきか助言をいただいて、近畿LINKtoposを今後も続けていく方針を立てることが出来た。

○課題

オンラインであったため例年のような盛り上がりにはならず、予想より静かな会になってしまったことは残念な点だった。オンラインでも、特にこのような少人数の場で意見が活発に飛び交うように、場を作る必要があると感じた。

〈中国・四国地区〉

【LINKtopos2020 学生委員 高知県立大学 健康栄養学部 2年 田中くるみ】

○概要

今回のLINK toposについて参加者の皆さんと先生方に一人一人話してもらい、全員の顔合わせと共に成果について話した。

○成果

オンラインの状況でワークショップの班以外の参加者同士の交流が少なかった分、感想の共有をすることによって一体感が生まれた。

○課題

オンラインならではの企画が少なく、今年らしさが足りなかった。また、基本的にカメラをOFFにするような進行だったため、参加者同士で顔を合わせる機会が少なかった。

〈九州・沖縄地区〉

【LINKtopos2020 学生委員 北九州市立大学 地域創生学部 2年 妹尾多恵】

○概要

今大会の振り返りを各々発表し、意見交流をした。個人としての振り返りをし、各大学の活動紹介とリンクトポスの経験をどう活かしていきたいかなども話した。

○成果

・オンラインの可能性として、年に数回程度であれば学生の意見交流の場としてオンラインリンクトポスが開催できるのではないかという話で盛り上がった。

・オンライン開催ということもあり、同じ地区という共通点をもったグループでの話し合いは、それまで実施したワークショップやアイスブレイク以上にアットホームな雰囲気を進めることができ、落ち着いた雰囲気でもリンクトポスを振り返ることができて良かった。

・九州沖縄地区の学生の交流の場となり、これをきっかけに地区別リンク開催

の企画が進めば良いと感じた。

○課題

- ・具体的に話すことを決めていなかったなので、振り返り→交流という単純な意見交流しかできなかったの、地区別リンクの開催に繋がる進め方をしたかった。
- ・実際地区別リンクを開催するにあたり、オンラインオフラインの判断は学生主体なのか公立大学協会ないし所属大学主体なのか知りたい。

3.2.4 ポスターセッション概要

【LINKtopos2020 学生委員 熊本県立大学 総合管理学部 2年 前田竜秀】

○概要

全国から集まる学生どうしが互いの活動について知り、各々の今後の活動への刺激としてもらうために設けた。

参加者に、事前にポスターやスライド資料を使った発表の様子を撮影し、そのデータを送ってもらった。その後、運営側で分野ごとに分類し、1週間前からYouTube上で参加者のみに限定公開するとともに、GoogleFormでの質問の受付を開始。本番では集まった質問を運営側が読み上げ、その場で該当する団体の方に回答してもらうという形式をとった。

大会終了後は、それぞれの団体の活動を改めて見るように視聴可能期間を延長し、時間内に回答できなかったものや事後に寄せられたものも併せて、質問と回答をリスト化して参加者に共有した。

3.2.5 ポスターセッション

【LINKtopos2020 副代表 岩手県立大学 社会福祉学部 3年 菊池眞悠子】

○概要

今年度のポスターセッションは、事前に回収してあった質問を運営メンバーが各団体に投げかけていくという一問一答形式で進めていった。それぞれの団体に1~3個程度の質疑を行った。

○成果

例年通り全国の団体の活動を知ることができる有意義な時間になった。例年は、いくつかの団体を選び、話を聞くため今回事前に動画の公開・質問の募集を行うことで、すべての団体に目を通す時間の余裕を作ることができた。またアンケートからは、「ポスター1枚だけでは足りない説明を、動画では収めることができた。」という声もあった。これらのことから動画の可能性を感じることもできたと言える。

○課題

資料を動画媒体にしたことで初めて動画を作成する人は、例年よりも資料作成に労力がかかったことが言える。また、当日は公立大学学生ネットワークの運営メンバーが質問を読み上げ、各団体に答えてもらうという形をとったため多くの人が傍聴するだけの時間になってしまったことが課題と言える。さらに、「質問を事前に知りたかった」や「もっと余裕をもって動画を見たかった」等の声も多くあがった。

3.2.6 閉会式

【LINKtopos2020 学生委員 岡山県立大学 保健福祉学部 3年 横田朱音】

○概要

閉会式では、先生方からの総評をいただき、その後運営から災害についてと防災の日についてのスピーチを行った。そして、閉会のあいさつ、終了後の注意点などを伝え、大会を締めくくった。

3.2.7 2日目総括

【LINKtopos2020 副代表 名古屋市立大学 人文社会学部 3年 田邊志織】

参加者全員に向けて、今年の実験を踏まえ、10年目になる来年のLINKtoposへの展望や、そのプレイベントの大会になるであろう「防災の日イベント」についての話をした。各地区の地区別LINKtoposへの足がかりとしても使えると考えており、全国LINKtoposの参加者にはぜひ中心となって参加して欲しいところである。このイベントについては追って詳細を決め、全国LINKtoposの運営メンバー各地区の参加者に情報を再度周知し、参加者を募ってもらうことにしている。

3.3 プログラム全体を通して

【LINKtopos2020 副代表 岩手県立大学 社会福祉学部 3年 菊池眞悠子】

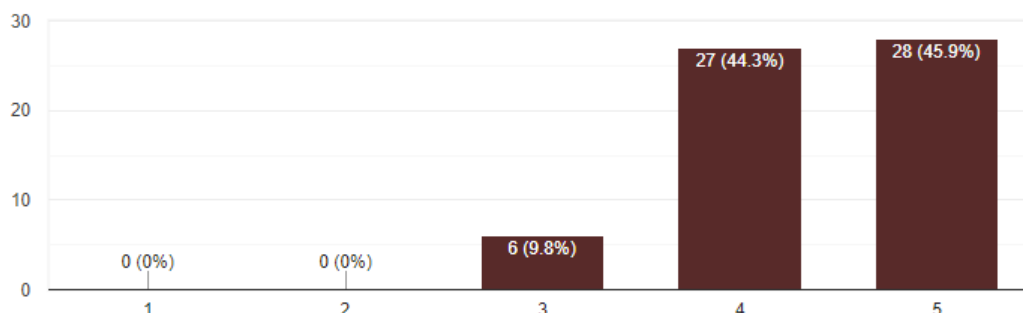
今年度のプログラムを通して、例年対面で行ってきたすべての活動を見直し、様々な不安の中で大会に向けて活動してきたが、当日は大きなトラブルもなく終えることができた。すべてのプログラムにおいて、ZOOMのブレイクアウトルームや、コメント欄を活用した。また、例年はFacebookのイベントページを利用して連絡を行ってきたが、LINEのオープンチャットを利用することで普段Facebookを使用しない人も気軽に利用することができていた。

3.3.1 プログラム全体の事後アンケート結果/参加者の声

【LINKtopos2020 学生委員 北九州市立大学 国際環境工学部 2年 川相恵吾】



61件の回答



参加者の9割の方が今大会を満足だと回答した。満足度の理由として、コロナ禍である今、交流できない状況の中、他大学の学生と交流ができ、またグループワークできたことに満足している。一方で、オンラインであることで、回線や機器の操作の困難、また事前にもっと明確に情報を共有してほしいとの指摘があった。

3.3.2 プログラム全体の総括

【LINKtopos2020 代表 高知県立大学 文化学部 4年 仲宗根忠史】

初めてのオンライン開催で運営の不慣れさが所々に見られたが、参加者の声を聞くと、オンラインだから講演を集中して聴けたや、他大学との意見交換の場がないと思っていたため良い機会となったなど、良い評価をいただく結果となり、とてもよかったと感じている。特に、オフライン開催時の課題であったポスターセッションに関して、動画を事前共有することで、参加団体は少なくなったものの、丁寧に団体の説明を訊くことができたのが成果としてあげられる。また、ワークショップでは教職員も参加するグループがあり、学生以外の意見を聞くことや、慣れたファシリテーションをみることで下級生の刺激になったとうかがえる。

今大会が約100人規模のオンラインワークショップを公立大学生が行えるということを証明する意味のある2日間となった。

4 次年以降の学生大会開催に向けて課題、課題への提言

【LINKtopos2020 代表 高知県立大学 文化学部 4年 仲宗根忠史】

今回、初めてのオンライン開催であり今までにない特有の課題が見受けられた。来年度以降オンライン開催も視野に入れて課題への提言を行う。

1. 講演会資料の共有

参加者が所属大学からの参加したため、二日間のうち1日だけの参加も容易となった。そのため、講演会を聞いてない参加者もいたため、投影資料を共有するべきであった。

対策として事前に講師に許可をもらい、資料の事前共有をおこなうことで事前学習にもつなげられるようにする。

2. オンラインツールの解説不足

運営側も参加者も不慣れなオンライン会議ツール：Zoomを今回利用したが、使い方の詳しい説明やトラブル対応がうまくできていなかった。今回起きたトラブルに対する対応策を作成し、使い方の説明をブラッシュアップしわかりやすくすることが来年度以降の課題である。

3. ポスターセッションのより良い開催方法

この課題が最も来年度以降で重要である。今回は事前に活動紹介動画を集め、WEBで参加者だけに限定公開する方法を取った。そして、当日には動画を見た中での質疑応答の時間を設けることにより、他大学の活動を理解できるコンテンツとなった。今回の方法で今までより、活動理解が深まったという意見が多かったものの、1週間という期間が短い、活動に対して熱い会話ができなかったのが悔しい、などの改善すべき点が上がった。

来年度以降、事前に動画で共有しつつ、本番により深く参加者と質疑応答や会話を楽しめるコンテンツにブラッシュアップすることで、LINKtoposの醍醐味の一つである他大学との交流につながる。

5 全国公立大学学生大会の今後の展望について

【LINKtopos2020 代表 高知県立大学 文化学部 4年 仲宗根忠史】

東日本大震災がきっかけで始まり、来年度で10年目を迎えるLINKtoposへの今後の展望として私は以下の2つを取り上げる。

1. 10年以上の歴史ある学生イベントとしてのブランド化

学生が自ら企画に参画し全国規模のイベントを10年続けているのは他では聞いたことがない。正直とても凄いことで、その歴史の2年間に携わることができてとても誇りに感じている。この歴史ある大会を、新型コロナウイルスの影響を受けた今年も絶えさせず開催したことで、これからも続けて発展させていくことがとても大切なことであると改めて感じた。

来年度以降LINKtoposというイベントを学生最大級のイベントにして、公立大学生の憧れになるようにブランド化して行って欲しいと願っている。そのために、各大学や公立大学協会の広報支援と運営学生の同世代に向けたイベント告知が必要であり活発に行ってもらいたい。

2. 教職員との積極的交流

今回や地区別LINKtoposに運営として参加して、LINKtoposならではの学びが教職員との関わりにもあると考える。教職員の中にはワークショップの手法や注意する点など確実に学生より知っていて実践している方がいる。その方から、知識を学び習得し実践する機会がLINKtoposにはあるのだ。また、教職員が学生と共にイベントに参加し、ワークショップやポスターセッションで学生に対し助言をしていただけるのもLINKtoposならではの、企画から本番まで教職員から学ぶことができるイベントなのだ。一方で教職員になりたてで、学生さんから学ばせていただきましたという実際の声もあった。学生と教職員が共に学び会える環境がLINKtoposであり、来年度以降この点にも注目して企画しさらなる発展を願っている。

6 謝辞

令和2年度全国公立大学学生大会 LINKtopos の開催に際して、ご指導・ご支援をいただきましたLINKtopos企画チームの教職員の皆様、公立大学協会事務局職員の皆さま、そしてこのご時世にもかかわらず、会場の提供に協力していただきました、岡山県立大学教職員の皆さま、運営として活動して下さった学生の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

今年度で9年目となりました、本大会も盛況で終えることができたのは、参加していただきました学生、教職員、学長の皆さまのご協力とご理解があってこそそのものと感じております。改めて協力していただいた多くの皆さまへ、心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

これからもお力をお借りすることが多々あると思いますが何卒宜しくお願い致します。重ねて、ご協力して下さった皆様誠にありがとうございました。

令和2年度 公立大学学生ネットワーク 代表
高知県立大学 4年
仲宗根忠史